君の知らない物語（2）

aoha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の知らない物語（２）

【Ｎコード】
Ｎ２７７７Ｉ

【作者名】
ａｏｈａ

【あらすじ】
西尾維新原作の『化物語』。その二次創作です。
前作、あったかもしれない未来を書いた『君の知らない物語』の続編です。時間軸がいろいろとおかしなことになっておりますが、ご容赦の程を。今回も同じく、羽川さんを幸せにしてあげたい短編です。

僕は男だ。
名前が女っぽいとか、態度がなよっちいとか、そんなことは関係ない。
僕は男だ。
男の中の男、つまり漢だ。
そんな意味不明な上に情けない自分を鼓舞して、僕は頑張ることにしたのだ。

というのも、羽川と付き合いだしてからというもの『格の違い』というやつを見せ付けられることになったからだ。主に、成績という形で。
だからといって、羽川と張り合おうとか、同じ高みになんてそんな風に考える僕でもない。そもそも僕なんかが敵うはずもない。
だが、しかし。だからといってやらないのは美しくない。
羽川と釣り合う男になろう、なんて大それたことは思っていないけれど、努力をしないのは美しくない。
そんな建前はさておき。
要するに僕は、気後れしているのだ。あまりに眩しすぎる羽川に。輝かし過ぎる彼女に。
本当に大切なのはそんな外面じゃないのは分かっているけど、それではあまりにも情けなさ過ぎる。散々、情けないところを曝け出しておきながら何を今更と思わなくもないが、それとこれとは話が別だ。
僕は、羽川の隣にあって恥ずかしくない男でありたい。
そんな想いを胸に。心機一転、不退転の意思で勉強をしてみたものの。二進（にっち）も三進（さっち）もいかない。二年間のツケは随分と高くついた。
早い話が挫折したわけだ。

そんな経緯をひた隠しにしつつ、マイラバー――羽川翼さまに、平身低頭御指南、ご鞭撻のほどをお願いしたところ、ご快諾いただいたというわけだ。

そして早速、放課後に図書館でマンツーマン（ウーマン？）のらぶどき勉強会（仮）と相成ったわけだが。

情けないことに、僕は今にも泣き出しそうになっているのであった。

特別難しい説明を受けているわけでも、戦場ヶ原よろしく言葉攻めされているわけでもない。

むしろ、簡単であるとさえ錯覚するような丁寧で優しいものである。物事の基本を忠実に押さえた上で雑学なども交えて決して飽きさせない。そのくせ、とんでもなく密度が濃かった。

「ここまでにしようか」

羽川がそう言った瞬間に一気に疲労が押し寄せてきたのだ。

頭が痛い…。

だが、決して不快ではない心地よいものだ。情報がオーバーフローしているわけではない、どちらかというと普段から使っていない部分を使ったような疲労感。筋肉痛の頭脳版だ。

「う〝ーあ〝ー」

「情けない声ださないの。いい？　阿良々木くん。阿良々木くんが無為に過ごしてきた時間を埋めるのはとても大変なことなんだよ？

はっきり言って、こんな程度じゃ全然足りないんだから」

うぐ。反論の余地はない。はっきりくっきり全くが無駄であった、無意味であった。

思い出すほどの出来事といえば、精々我が妹たちが中心となった

事件のいくつかが思い出されるだけ。そんな、挫折と鬱屈の日々。

「ほら、阿良々木くん。閉館だよ、早く片付けて帰ろ？」

「ああ」

言って右手の時計に目をやればもう午後六時。

確か、授業が終わってすぐ始めたから、約二時間半か。その間、超集中状態にあったわけか。そりゃ、疲れもする。

ぐぐっと、ひとつ伸びをして、手早く参考書やノートをまとめてファイルする。・・・って、凄い量になっていた。

学校の授業一年分くらいになろうかという量だ。

僕の身体が吸血鬼もどきのそれでなければ、腱鞘炎くらいにはなっていたかもしれないな。

「阿良々木くん？」

「ああ、すまん。すぐ片付ける。必ず追いつくから、先に行っててくれ」

「阿良々木くん」

「はい」

「テキパキ動く！」

訳の分からないボケは黙殺された。

「Ｓｉｒ，Ｙｅｓ，Ｓｉｒ！」

サーじゃないでしょ、もう！と呆れる羽川。
どうしてだろう。羽川を困らせることが、羽川を呆れさせることだけがどうしてもやめられない。なんというか。仕方ないなあ、とか。そんなリアクションをさせたくなってしまうのだ。
ほら、好きな子にはいじわるしたくなる男の子がいるのと同じで、僕は羽川を呆れさせたい男の子なんだ。
と、そんな風に結論を出し、ひとり納得したところで。いそいそと荷物をまとめた。手早く、なんて言った割には変な考察をしていたせいでずいぶんと時間をかけてしまっていた。

「よし、帰ろうか」

「うん」

本当に呆れながらも、待っていてくれた羽川と連れ立って図書館を後にした。

「阿良々木くん、大丈夫？」

「ん。何がだ、羽川」

「信号。赤だよ」

静かな夜道。

横断歩道と赤信号。
阿良々木暦と羽川翼。
歩く男と止める女。
どうやら、信号に気がつかずに渡ろうとしていたらしい。
車など通りはしない、どうして信号がついているのかも怪しい小さな道だ。

「ああ――」

言われてやっと足を止める。

「疲れた？」

「かもな」

「じゃ、軽く復習したらすぐにおやすみだね」

「ああ」

短い沈黙。信号は赤のまま。

「今日は、あまり喋らないんだね」

「そうか？」

「うん」

「……」

「悩み事？」

「まあ、そんなところだ」

「それは、阿良々木くん的に重要？」

なんだ。今日はやけに絡んでくるな。
いや、別に会話が嫌なわけなんかじゃ絶対ありえないんだが。
いまいち、調子が出ないというのも確かだけどな。

「かなり。いや、最高機密だな。これ以上は聞いてくれるな。お前のためなんだ」

「そんなこと言われたら気になるよ」

「お前の身を思ってこそなんだ」

「言ってよ」

「ダメだって」

「言って」

「だめ」

「言いなさい」

「だ――」

「言え」

ぐすん。羽川が戦場ヶ原みたいだ。
もちろん、お互いに冗談のテイストをたっぷり含んでいるわけだけれども。……どうしても羽川の強気には敵わない。普段でも敵わないけどさ。
僕は降参して、胸の中にしまっておいた言葉を口に出す。
「いやな、羽川と僕は恋人同士なんだなあ、と」
刹那。羽川は目を見開いて驚きのリアクション。
そしてあからさまに肩を落とす。
「なあんだ、そんな事。びっくりしたー。また何か大事件でも起きたのかと思った」
「そんな事呼ばわりされたこと自体が大事件だよ！？」
僕の身が大惨事だ！！ちょっとしたノロケのつもりがなんでこんな目に！？
「あっはー。ごめんごめん。
そんな事、じゃないよね。不謹慎だった」
ふう、と一息。
「うん、そうだね。私と阿良々木くんは、お付き合いしてるんだもんね」
そう言って。
羽川ははにかむ。
照れ臭そうに。頬を赤くして。

そんな可愛い羽川に、逆にカウンターをもらって、慌ててとぼける。
自分で振っておいてなんですが、耐えられません！
「そう。僕たちはどつきあいをしているんだ」
「どついていい？」
「ごめんなさい」
速攻で頭を下げた。
羽川さん、その眩しい笑顔が怖いです。
ともかく。一方的にどつかれるのは勘弁だ。どつきあいをしているのは火憐ちゃんとだ。過去にさかのぼれば旧ハートアンダーブレード――忍や、神原。つい最近では影縫さんだが……あれは、一方的だった。いや、火憐ちゃんのときも一方的だったな…。あれあれ、神原のときもそうじゃなかったか？いやしかし、一介の紳士として婦女子に手を上げるような愚行は避けるべきことのはずで――――
などと考え事をしていたら、何かが手に触れた。
柔らかくて温かい何かが。
きゅ、と僕の手を握る。
羽川の手だ。
僕を救ってくれた、神の手。
羽川なら「ただの、普通の手だよ」なんて苦笑するんだろうけど。
僕にとってはどうしようもないくらいにゴットハンドだ。
その手が、今まさに手を握っている。
「なんて、いうかさ。
ときに女の子は、とと誰かの手を握りたくなることがあるんだけど…わかるかな？」

えっへへ。とはにかんでみせる。
既視観。
ああ、パンツを見たときか。
一人納得する。
でも、あのときはまったくの他人でこうなるなんてまったく思いもしなかった。一体、どこでフラグがっ立ったのだろう。そんなことを思った頃もあったが、今では恋人同士。
「ああ、分かるとも。僕も唐突に八九寺に抱きついて頬擦りしたくなるときがある」
「阿良々木くん」
「ん？」
「真宵ちゃんに何してるの？」
ウルトラミス！口が滑りました！
「い、いえいえいえいえいえ？　なにを仰いますやら羽川さま！？」
「ねえ、阿良々木くん。…真宵ちゃんに何をしてるの？」
ひいいいいいいいっ！！
「い、いえっ、これはですねっ。過ぎ去った過去、つまるところのカコバナってやつでありまして！？」
「へえ、カコバナ。過ぎ去ってしまったことならいいんだ。罪には

ならないんだ？　ふうん」

ぐおおお。痛い、痛い！　羽川さん、そんな目で僕を見ないで！！

「そっかそっか。阿良々木くんはそんな人だったんだ。私、誤解してたかも。

阿良々木くんはそんな、誰にでもセクハラなんてするサイテーヤロウだったんだ…。

んん？　ということは戦場ヶ原さんも神原さんも千石ちゃんも忍ちゃんも……それどころか火憐ちゃんと月火ちゃんも、阿良々木くんの毒牙に…？」

おおおおお……。

羽川さまが。羽川さまが、呆れを通り越して悲しんでおられる！

というか一部は確実に冤罪なんですがっ！？

「んん。……仕方ないか」

額に手をあてて、大きな、それはもう大きなため息。

そして、どこか諦めと決心を感じさせるそんな目をして、羽川は言った。

「阿良々木くん。大切なお話があります」

ぱっ、と繋いでいた手を離し、僕と羽川は正面から見合う。

「阿良々木くんがそういうことに興味ある年頃なのは分かります。

戦場ヶ原さんみたいなキレイで可愛い女の子に触りたい気持ちも分かります」

ちょっと拗ねたように、そっぽを向いて。

「でも！！」

向き直って対面。

普段は優しい曲線を描く眉を吊り上げて。

「私は阿良々木くんの恋人なんだから、、そういうことは私になさいな。

言ってくれれば、ちゃんと相手するから。いい？」

僕の恋人は宣言なさいました。

いや。その。

なんというか。

壮絶に誤解されている気がする。いや、正しくは将来の危険性という意味では正しいかもしれない。それっぽいことは何度かあったわけだし。

僕も健全な男子であるから（過去にさかのぼればエロ本を購入するであるとか）。はっきりいって美人比率の非常に高い。日々の生活に危機感を覚えるときもある。だが、僕にも一応の常識とか言うものは備わっているわけで本能に依らぬ理性部分では自制している。だって僕は羽川の恋人なのだから。

元々のチキン気質を否定しきれないのも確かだけど。

それはさておき。

しかし。しかしなのである。

「羽川。少し発言に気をつけろ。それは僕が誤解する」

「んん。誤解してくれても私はいいんだけどね。

つまりね、阿良々木くん。私が言いたいのは———」

一度、言葉を切って。

「そういうスキンシップは、まず恋人。彼女である私にするべきではないでしょうか」

羽川さまはのたもうた。

「は？」

「私は、阿良々木くんの彼女なんだよ」

「そ、そうか」

情けないことに、僕はそれだけしか言えなかった。その、衝撃に。

嫉妬、なのか？あの羽川が、嫉妬？

いや、そうじゃない。

羽川だって女の子だ。どんなに優秀で、冷静さを失わないからって、超人じゃない。聖人君子なんて、そんなものであるはずがない。

羽川はただのどこにでもいる女の子で、たまたま優秀で、聖人君子のような、という修飾が似合うだけの女子、というだけ。

…つーか、ここまでお膳立てされて何もできない男はクズだ。いや、それ以下。

「羽川」

「うん」

「あー…うん。その…」

「うん」

「そう、その…えっと」

「うん」

「お、お嬢さん！」

「……」

「お、お、お、お、お手を、は、拝借してよよよろしいでしょうか？」

テンパりまくりの噛みまくり。しかも怪しい口調に時代がかった言い回し。いったい、どこの何者だよ、お前は。全く、穴があったら入りたい。なかったら掘ってでも！

「よしなに」

たおやかな微笑とともに、差し出される手。その手を僕は跪き押し戴く。

ったく、僕は一体なにをやっているんだろう。

ここは舞台の上でもなければ、中世でもない。

現代の、それも天下の往来で。

恋人の前で、騎士さまよろしく手をとっている。ここで手の甲にでも口付けをできればあるいは完璧だろうか？生憎とそんな度胸は持ち合わせていないが。

ああ、もう。くそっ。

これで僕も火憐ちゃんを笑えないし、説教もできなくなっちまった。

妙にブルーなき分にひたりつつも、羽川の手をしっかりと握る。
柔らかく、温かい手。どうしようもなく駄目だった僕を立ち直らせてくれた女の子。そう思うと、この手を握っているという現実は感動ものである。

「阿良々木くん。そんなに物珍しげにされると、恥ずかしいんだけど」

「いや、なんていうか。感動してる」

「手を繋ぐ前に、パンツ見たり胸を触ろうとしたり。いろいろと順番すっ飛ばしてるけどね。
まあ、事故と緊急避難、ということで見逃してあげましょう」

「ただし。私は気まぐれな猫だから、それだけは肝に銘じて置くように」

「ああ」

「帰る？」

「……どこかに寄っていくか？」

「んん？　どこかって？」

「特別どこか行きたいわけじゃないけどさ、ホラ、その、なんていうか」

知っているからこそ。羽川を一人で散歩させるのは、なんだか嫌だった。

「ありがと、阿良々木くん。
じゃあ、リクエスト。阿良々木くんの家に行きたいな」
「ウチに？」
「うん。ほら、火憐ちゃんと月火ちゃんにもご挨拶しないと」
「まじで？」
「だって、必要なことでしょ？」
「あいつらに……？」
「なに言ってるの、阿良々木くん。大切な家族じゃない」

柔らかな笑顔の羽川。っていうか、羽川と妹たちは普通に知り合いだし、交友がある。
ううっ。確かにいつまでも黙っているというのも変だし、羽川の言うことには一理どころか百理はある。いや、真理というべきか。
確か、羽川から告白されたのが五月の頭だったか。そして今は夏真っ盛りといった感じの七月。期末テストが目前だ。
付き合い始めてから約二ヶ月、そろそろ何か進展のあっても良い頃かな、とは思う。というか、言われるまで気付きもしなかった僕はもしかしなくても相当に鈍いのだろうか？
「んん。絶滅天然記念物くらい、かな？」
「まじで！？」

「まじで。意外も意外。阿良々木くんは結構に人気があるんだよ？」

「初耳だ…」

僕はもしかして、いろんなところで損をしていたりするのだろうか？

「代わりに男子からは恨まれてるみたい」

朗らかに笑う羽川。笑顔は眩しいが発言が物騒だ。

「できればそれは聞きたくなかった！」

時々、妙に怨念染みた視線を感じるのはそれが原因か！！

「ちなみに。あることないこと、噂に流したのは私です」

「仕込みからしてお前かよっ！？」

なんで！？どうして！？僕、なんかやらかしましたか！？

「別に。強いて言うなら、お返しかな」

……そういえば、羽川の噂を流したこともあったっけ。羽川≧直江津高校全員、みたいな内容のを。いや、今でもその内容については間違っていないと思っているけど――――見方は変わったかもしれない。

羽川と出会って。

怪異に出会って。

友達になって。

付き合うように、なって。

「そうか、お返しなら仕方ないな」

僕は、また笑えるようになった。

それこそ、三ヶ月前には全てが灰色でしかなかったのに。今はこんなにも色鮮やかだ。

今や全くの別人になったとすら言えるだろう。

羽川は「阿良々木くんの更生は私の人生目標になるかも」なんて笑って言うけれど。僕はもう、とっくの昔に、お前が内側に踏み込んできてくれたときに更生しているんだぜ。

多分、羽川はそれも全部知っているのだろうけれど。

なんて、そんなことを考えたら笑えてきた。

「阿良々木くん、どうかした？　急に笑い出して」

「いやいや、毎日が楽しいな、と思って。つい」

これは心から。

「羽川、お前は楽しいか？」

「んん。毎日が大変だけど。楽しいよ」

その大変、という部分は主に僕か。

羽川先生におかれましては、いつもご迷惑をおかけしております。

「いえいえ」

もうね。なんていうか。

羽川にはもう一生頭が上がらないと思うんだ。
いろんな意味で。

「さて。それでは、我が家へご招待させていただいてもよろしいでしょうか？」

僕は羽川の正面に跪いたまま、忠誠の騎士よろしく羽川を見上げる。
というか、ここまでの会話の間僕はずっとこの姿勢だったんだよな。
…なにやってるんだか。

「うん、よろしく」

「では」

僕はようやく立ち上がる。
羽川の手は離さないまま、信号が青になるのを待つ。

「前にも、こういう場面、あったよね」

「始めて会ったときのことか」

「うん」

握る手に、俄かに力が篭る。

「まだ、半年も経ってないんだよね」

「そうだな。色々ありすぎたくらいだ。

実は密かに心配しているんだが、イベントがネタ切れしたりしないか？」

「あっはー。大丈夫だよ。これくらいで尽きたりなんかしないよ。私も、阿良々木くんも」

「だって、どうしようもなく自分勝手な二人組だよ？　何も起こらないなんてありえない」

挑戦的、というには穏やかな悪戯っぽい笑みで。

「ね？」

なんて。

全く、この人は。

「ははっ、違いない」

羽川と二人、笑う。そんな将来ならどんとこいだ。全くもって望むところ。

さしあたっては、輝かしい将来のために我が妹たちの洗礼を受けなければならないが———それもまた楽しいだろう。

常の僕にはないポジティブ思考。

僕をそうさせるのは確かな温もりを伝えてくるこの手。

ただの手なのに。こんなにも頼もしい。

「植物じゃなくて良かったって、心から思うよ」

「どういう心境の変化？」

「彼女がいるって幸せだな、ってことだ」

「似合わないねー。そういうの」

「放っておいてくれ」

二人。横断歩道を歩く。
いつかのように分かれることはない、同じ道。
羽川と共に歩く道だ。

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
前作、『君の知らない物語』の続編になります。タイトルは数字が増えていくだけです（笑）

さて、今回は前作で恋人同士になった阿良々木くんと羽川さんのお話の続きです。なんかもう、個人的な妄想大爆発ですがこの妄想が続く限りは続編を出していきたいと思います。

それでは、いずれまたお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2777i/

君の知らない物語（2）

2010年10月9日18時14分発行